

古代アレクサンドリアにおける 古典哲学とキリスト教の釈義との出会い(講演)

チャールズ・カンネンギーサー

日本の中世哲学会の席でこの講演を行うことは、私にとって特別な名誉であり、また大いなる特権であります。ここで選ばれた主題そのものは、直接中世に関するものではないとしても、それは少なくとも西欧文化における中世の哲学と霊性の主要な源泉のいくつかについて、わたしたちに多くのことを教えてくれます。古代アレクサンドリアの古典哲学は、プラトニズムに支配されており、また、最も一般的なキリスト教の釈義の形態は、主としてアレゴリズムによって特徴づけられ、西欧中世の諸伝承の千年間を通じて普及した、古代アレクサンドリアの学問に沿って展開しました。

アレクサンドリアのアレゴリズムとプラトニズムは、緊密に結びついております。アレゴリズムは、ホメーロスのような古代詩人たちの信じ難い物語や、時として受け入れ難い神々に関する叙述を、比喩的方法で理解できると説明することで、意味あるものとするのに寄与しました。他方、プラトニズムは、わたしたちが住んでいるこの感覚的経験の世界を、もうひとつの別の世界、すなわち、超越的パラダイムの世界の、全くの副産物とみなすもので、そこでは、わたしたちの精神はその身体から解放され、それらが本来帰属する神的幸福の領域に再統合することとなるのです。アレゴリズムもプラトニズムもどちらも、物質的データはある説明を求めます。字義的意味をもつ書かれたテキストであれ、すばらしい神秘的な現象のいっさいを含む物質的コスモスであれ、これらはどちらも、より高度な理解を求め、直接的感覚から内的思考への、精神の向け変えを求めます。そこではいかなるテキスト

も書き換え可能で、コスモス全体は変貌しうるのです。書かれたテキストやコスモスの実在性において謎めいて見えるものへの探求は、どちらの場合も、沈黙した観想を、非常に声高で活発な議論と結びつけています。いずれの場合も、学問が必要とされ、学問とともに意見の相違が不可避的に生じ、多様な方法論が相矛盾する結論を導き、思想の諸学派が幾世代にもわたって体系的に打ち立てられるのです。古代アレクサンドリアの歴史全体は、そのような知的議論の騒々しさに満ち満ちているのです。

この都市の創設者は、哲学者アリストテレスの弟子で、世界史のなかで最も有名な一人、マケドニアのアレクサンダー大王であります。紀元前 331 年、偉大なアレクサンダーは彼にちなんで命名された都市のために、地中海への出口であるナイル河西のでこぼした海岸線をもつ、荒涼とした平らな砂浜の場所を選びました。彼の描いたこの都市の地図には、壁と、網の目に張りめぐらされた東西南北に延びる道路が設計されています。もしもアレクサンダー自身が彼の邸宅に付属した巨大な建造物である、より高度な学びのためのセンターとみなされる図書館の建築を命じたということが事実であれば、彼は当初より特別な文化的意義をもつ都市を計画していたように見えます。これは定期的に講義を行ったり学生を受け入れたりする義務のない、一種の高等研究所で、庭園と運動施設、プール、多数の図書を備えていました。古代の著述家たちは、ここには 3 世紀にわたって収集された、70 万部の貴重な写本があったと語っています。それらは紀元前 48—7 年に、カエサルによってこの都市の領域が焼かれたとき、不本意にもこの場所全体が焼け落ち失われてしまいました。

* * *

十分驚くべきことに、まさにこの時期に、アレクサンドリアの最も偉大な天才のひとりで、わたしたちの主題にも関係する人物が生まれています。哲学者にして宗教思想家のアレクサンドリアのフィロンは、この著名な図書館の破壊によって、一見したところ知的資産の何らの損失も被ってはいませんでした。彼は多くの著書のなかで、アレクサンドリア文化の遺産全体に及ぶ

資料と参考文献の一覧を生み出したのですから、フィロンは敬虔なユダヤ人で、この都市の非常に有力なユダヤ人少数派でもあり、上派階級に属していました。彼は時間とお金を彼の宗教的信仰の奉仕についやす金持ちで、ユダヤ教の聖なる書物の収集であるトーラー（その表題は創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、そして申命記の五書ですが）の、最も本来的にアレクサンドリア的な注解書を生みだしました。

フィロンはガリラヤ人イエスと同時代人で、彼はエルサレムへの巡礼の際に、通りでイエスと会っていたかもしれません。イエスが信仰それ自体というより神秘的なレベルで成し遂げた奇跡に匹敵することを、ある意味で、文化のレベルで可能にしたのがフィロンでありました。彼は新たな解釈学を創造したのであり、そこではトーラーの古い言葉が新しい言語を語り始めるのです。彼は、自分にとってアレクサンドリアの都市そのものより古い聖書を、すべての時代とすべての文化的相違を超越するものとみなしていました。彼はそれらが豊かな意味に満ちており、それはただ彼の時代のアレクサンドリア文化のなかから入手しうる知的資産のすべての領域を動員することによってのみ把握され得ると言明しています。彼の自由学芸的精神は、彼がトーラーのなかに読んだものと、他の書物のなかから学んだものとの間に同等な関係を見いだすのに、飽くことがありませんでした。同時に彼の敬虔な精神は、鋭敏で欠けのない注意深さで、ひとつの単一な終局点に到達するために、彼の思考の広範な視野を監視していました。それはすべての文化が、とりわけその哲学的基礎に関して、聖書に見いだされる神の定めに従うことを示すためでありました。

フィロンは、主としてプラトニズムによって形成された思考の伝統における人間が求めるものについてリアルな感覚をもっていたゆえに、非常に才能豊かな霊的案内者のひとりでありました。彼は古典的パイディアの自由学芸的訓練の課程を終えていました。その学びの一連の構成要素は、フィロンの著作にその刻印を残しています。それらのなかには多くの文法や、修辞学や弁証論の規則へのひっきりなしの言及が見られ、また、主として新ピュタゴ

ラス主義の象徴的方法で理解された数論の豊富な使用が見られ、またフィロンの靈感が幾何学や、あるいはそれ以上に、天文学に依拠している部分が多いです。一連の教育を構成する7つの要素に加えて、フィロンは、時おり、明らかに哲学をつけ加えています。それは哲学こそが真の知恵の幸福へと通じているとみなされ、それゆえ他のすべての科学はその僕とみなされねばならないからです。こうしてフィロンが達成したことは文化的な総合を果たしたことにあります。それはフィロンの科学的な好奇心と読みの幅広さを説明するのみならず、その時代のヘレニズム文化の真の代表者としての地位に彼をすえるものでもあるのです。

フィロンは一貫してその文化の豊かな複雑性を楽しんでおり、彼は個人的な学びにおいても、若い頃からの体育館での熱心な余暇時間においても、これと同化していたのです。もしも彼と、最も教養のある彼の同時代人、主として中期プラトニズムと呼ばれる学派の哲学者たちとの間に相違があるとすれば、それはフィロンの信仰という霊的レベルに見いだされます。フィロンは強力な信仰者として、彼の伝統的な会堂での宗教形態と異教の習慣との間の落差について、それが偶像崇拝的であるとか、密儀的祭儀への入会によるものであるとかいう、不満は決して言いませんでした。彼は、彼自身の伝統について、この方が、高度な古代性を有し、倫理的かつ知的な面で攻撃不可能な水準を保っているというように擁護する議論をもちいて、その卓越性を述べるに過ぎないのです。フィロンに固有なのは喜びであり、それは彼が聖書のなかに啓示された神の根本的な超越性を祝うとき、彼を酔わせて溢れんばかりの発露の地点にまで至らせます。

わたしはここで『モーセによる世界の創造について』(Peri tes kata Moysea Kosmopoiias) というフィロンの論文から、数行を引用したいと思います。

「人間精神が人間のなかに占めている位置は、偉大な支配者が全世界に占めている位置と、正確に一致するのは、明らかである。それは不可視的である一方、それ自体としてはすべての事物を見ている……それは

技術と科学によって、多くの方向に分岐した道を開く……精神は飛翔する翼に乗って大気とそのすべての局面を観想したとき、もっと高く、エーテル界にまで運ばれる……そこでその眼差しを感覚によって識別しうるすべての実体の境界のかなたに向けて、ついには可知的な世界が望める所へと到達するのである……それは、あたかもコリュバスの狂騒に満たされた者たちのように、しらふの酩酊に酔いしれ、自分たちの世界とは別のはるかな世界をもとめるより高貴な欲求に捉えられ靈感をうけるのである。これによって精神が感知できる事物の最上の蒼穹へと運ばれるさまは、偉大な王自身へと至る道を行くかのようである……」(69-71)

フィロンによれば、人間の精神は、自分自身の力によって、肉体やコスモスから課せられた限界から抜け出すものであります。終局において、それは神の啓示の耐え難い光に直面します。フィロンが言うように、「彼（偉大な王）を見ようとするあこがれのただなかにあつて、純粹で強烈な集中した光線が、激流のように流れ出し、理解の眼はこれを一瞥するだけで眩んでしまう(71)」のです。なぜなら、もし、天地創造や、アブラハムや他の族長の物語において、あるいはまた、モーセのシナイ山への神秘的な登頂において、神は自らを知らしめているのであれば、フィロンのプラトンの解釈学によれば、それは常に、人間の精神に自分自身の超越性を経験させるためのものなのです。トーラーのこれらの物語を内的に適用することによって、真の信仰者はその意味を現実に生きるものとするのです。彼らは、自らの精神を超越的知識のまさに源泉へと至る上昇的観想へと高めることによって、アブラハムやモーセに与えられた神の啓示のプロセスへと実際に参与することになるのです。

今度は『誰が神のものの相続人か』という著作から引用したいと思います。彼が「主はアブラムに言われた、あなたは自分の国、親族、父の家を離れて、私の示す国に行きなさい」という『創世記』第12章の冒頭の章句にとくに注釈を加えている箇所です。以下、フィロンは自分自身に向かって、次のように語っています。

「したがって、我がたましいよ、もしおまえが神の善きものを受け継ごうというあこがれを感じるのであれば、おまえの国、すなわち肉体とか、おまえの親族、すなわち感覚とか、おまえの父の家、すなわち言葉とかを離れるのみならず、おまえ自身から逃れ、おまえ自身から旅立たなければならないのだ。ものに取りつかれた者やコリュバスの狂騒にある者のように、靈感に満ちた狂騒に満たされなさい。預言者たちが靈感に満たされているのと同様に。」(69)

これはフィロンのアレゴリズムの好例です。『創世記』12:1によるアブラムが離れるように命じられた「国」は、フィロンの自己に向けられた勧告においては、フィロン自身のであれ、識者一人ひとりののであれ、その「肉体」となっているのです。アブラムの「親族」は「感覚」となり、「父の家」は今や「言葉」と了解されるのです。カルデアの故国を後にする族長は、今や信仰者の共同体にいるすべての人にとって「自分自身から逃れる」ことを意味しているのです。『創世記』の中の、記憶の彼方の過去に及ぶ種族に関することを語っている地理的な物語から、フィロンのアレクサンドリア的なアレゴリズムは、読者に、まさに今、自分たちもアブラムのカルデアからの旅立ちに関わっているのだと考えさせ、自分たち自身の霊的な旅によって、族長の移住が象徴的に呼び覚ます挑戦を引き受けるように促すのです。

フィロンのアレゴリーによって示されたそのような脱自的な経験の内から、信仰者は人生においてもっとも価値のあることとはなにかを学ぶと考えられるのです。書かれたトーラーを象徴的に演じることを通じて、彼らは徳を身につけ、真正の知恵と幸福に向けて生涯にわたって前進するよう務めることができるのです。これがフィロンの実験の最終目標なのです。言い換えれば、フィロンの読者ならば、ユダヤ教の信仰者が義務を負っているトーラーに真実でありながら、同時に、真のアレクサンドリア人として、プラトンの『パイドロス』篇に言われるような、超越性の生来的な必要を経験することにもなるのです。

フィロンの貢献についてさらに詳細に論述したいのはやまやまですが、私の講演のトピックはアレクサンドリアにおける古典哲学とキリスト教の積義であります。フィロンは紀元後40年頃没しました。彼がキリスト教のことを耳にしていた可能性は全くありません。彼は敬虔なユダヤ人のひとりとして没しました。彼の死後、アレクサンドリアのユダヤ人の共同体は66年から138年に至る、ネロ帝トラヤヌス帝ハドリアヌス帝の治下、激しい大変動を経験することになります。幸いなことに、フィロンの著作は大火による破壊から免れて、アレクサンドリアの図書館に保存されました。そこで、フィロンの著作はアレクサンドリアの高等教育を個人的に利用することのできた最初期のキリスト教の知識人たちに見いだされました。これら知識人のひとりに、もともとはアテナイ出身の哲学者、クレメンスがおります。

クレメンスはアレクサンドリアのキリスト教の学校の最初の傑出した教師となりました。彼は、著作の中で、霊的な価値のいっさいの源泉である神のロゴスを祝う、熱狂的な性向を、社会の倫理的な規範や日常生活の中で守られるべき善き行動の基準に結びつけたのでした。彼の有名な著作『勸め』（いわゆる、プロトレプティコス）には、真にヘレニズム的な情熱が鳴り響いています。次に引用します。

「この新しい歌はなんと力強いことだろう。死んだ者、本当の生に与ったことのない者も、この歌を耳にするやいなや生き返る。この歌は、創造の全体を心地よい秩序へともたらし、諸要素の不調和を一致へと整える、こうして、全宇宙はこの歌に調和するようになるのである……。この純粋な歌は、宇宙の宿り、万物の調和、中心から周辺へ、また、末端から中心へと広がり、……父のような神の意向に沿うように、万物を調和させる……。聖霊の力によって、神のロゴスは、この偉大な世界を、そしてまた、人間という小さな世界、すなわち、魂と肉体をとともども、調和ある秩序へと整える。宇宙というこの多声の楽器によって、神のロゴスは神に向かって楽をかなで、人間の楽器に向かって歌いかけているだ」。 (1)

訓練された哲学者として、クレメンスは、最良のアレクサンドリア的なやり方における折衷を行っていました。彼はあらゆる思想の学派に対して開かれており、彼の生き生きした著作において、プラトンやストア派を使徒パウロと会話させることになんの困難も感じませんでした。たとえば、彼が、神は「単に説明し尽くせないという意味で無限であるのみならず、形も名前もないという意味でも無限なのである (Stromateis 5, 12, 81)」と言うとき、彼の宗教心の中では、パルメニデスはモーセと同じ神観念を持っていたこととなります。クレメンスは、215 年頃、セプティミウス・セウェルス帝による迫害で追放の身の上で没しました。多方面にわたるエッセイの集成である、彼の著作『ストローマティス』(綴れ織り集)の中で、彼はフィロンについて少なくとも 4 回言及しています。彼はフィロンを、数の神秘的な意味を愛した「ピタゴラスの徒」として賞賛し、また、ヘレニズム文化との関係で聖書をいかに解釈するかを学ばせてくれる傑出した聖書解釈者として賞賛しています。こうしてみると、キリスト教護教家クレメンスは、ユダヤ人フィロンの方法によって直接に息吹かれた聖書のアレゴリー的解釈を提供したということができるでしょう。

* * *

クレメンスのもっとも有能な弟子が、あの古代キリスト教でもっとも偉大な聖書解釈者、オリゲネスでした。セプティミウス・セウェルス帝によるキリスト教への迫害の激しい中、わずか 18 歳にして、オリゲネスはクレメンスから引き継いで、アレクサンドリアのキリスト教教理学校の校長の地位につきました。202 年から 231 年のほぼ 30 年間、オリゲネスは感嘆すべき知的冒険に従事しました。彼は大学、といってもつまり、アレクサンドリアの異教徒の高等教育機関(正確にどの施設とは特定できませんが)に再入学し、そこで様々な哲学の教師のもとで学ぶこととなります。それら教師の中には、アンモニオス・サッカスもおりました。彼はまた、当地のグノーシス派の仲間のグループとも接触がありました。知識を通じての救済という、部分的にはキリスト教の信仰に触発された神話的形態をとった救済理論を持つ

ヴァレンティヌス派のグノーシスの誘惑によって、彼のキリスト教的な魂は、根底から挑戦を受けました。彼はまた、ユダヤ人の学者のもとで、ヘブライ語の聖書原典の言葉に習熟するために勤勉に研究しました。しかしなによりまして、オリゲネスが自己の能力を開発するのに成功したのは、自分自身の宗教的確信について徹底的に思索することができるようになったことです。たゆまない学習によって、彼は、哲学的な首尾一貫性と自分が体験したキリスト教の信仰の実存的な適合性に関する、自分自身の体系的なヴィジョンを育みました。彼は、『諸原理について』（ペリ・アルコーン）という著作によって、その後の幾世紀への基礎を築くとともに、旧約新約聖書に対する膨大な注解書を著したことによっても、キリスト教思想の歴史の上で最初の知的な天才となりました。

ここで、オリゲネスが『諸原理について』（ペリ・アルコーン）に付した序文の最後の数行のみを引用したいと思います。そこには、体系的な思想家としてのオリゲネスの強い決意が特徴的に現れています。

「教理について相互に関連した全体としてまとめあげたいと欲する者は誰でも、ここに述べたような観点を基本的根底的な原理として用いなければならない。それは「知識の光によって自らを照らしなさい（『ホセア書』10:12 七十人訳）」という戒めにもかなったことです。こうして、明白な説得力のある議論によって、その人は個々の特殊な点についても真理を見いだすことができ、われわれが述べたように、その人が聖書に見いだす実例と宣告や、正しく理解されたことから論理的に導き出されることを確かめた結論の助けを借りて、教理についてひとつのまとまった全体を作り出すことになるのです」。

オリゲネスの天才は当然のことながら、解釈学的な性格を持っていました。聖書のある箇所を注解する一般信徒むけの講話（ホミリア）においてばかりでなく、彼の理論的な著作においても、このアレクサンドリアの巨匠は、彼が聖書から受け取った聖なる教えと厳密に整合するものとして、自分の思想をとらえ、その使信を伝えることに間断ない努力を傾けたことを証し

ています。彼が読んだ聖書は、アレクサンドリアでおよそ3世紀をかけて完成されたギリシア語訳のテキスト、いわゆる、七十人訳聖書（セプテュアギンタ）であります。彼は、ユダヤ人たちの聖書のあの翻訳が、どれほど真理を知り徳を行うのに役に立つものであるかを示すのに飽くことがありませんでした。教会の教理的な伝統に深く関わった神学者として、彼は2世紀の哲学者ケルソスがしたような異教の側からの異論や、マルキオンやグノーシス派のような異端者からの異論に対して、教会の教えを擁護する反論も著しております。

こうして、オリゲネスは、フィロンのように、しかしあくまでも、キリスト教の伝統の枠内のものとして、ヘレニズム文化と宗教的信仰との典型的にアレクサンドリア的な総合を体現したのです。フィロンのように、彼は聖書の、といっても今度は新旧約両方からなるキリスト教の聖書であります。その注解を継続的に生み出すことに彼の学識のすべてをつき込みました。自由学芸的教育は、フィロンの場合と違って、その著作のあらゆる箇所に顔を出すことはもはやありませんが、しかし、それでもこの教育はオリゲネスの精神にずっと生き続け、たとえ彼のキリスト教的感性が異教徒の詩歌に拒否反応を示すかにみえる場合があるとしても変わりはないのです。プラトニズムはキリスト教の衣裳を纏って、優位を占めています。それは、二つの世界の二元論という形をとり、英知的世界では、すべての時代に先立って天上的で理性的な被造物は、絶え間なく至高の神性を賛美し続けています。他方、物質的世界の中では、人間の魂は身体にまつわる偶有性からの解放と、真の精神性の天上的領域への帰還を求めてあがいています。有徳な生活の究極的目的は、すべての信仰とすべての学問的知識の源泉である神のロゴスを直接に観想すること以外にはありえないというプラトンの二元論は、オリゲネスの禁欲的教えに靈感を与えています。わたしたちはその観想に招かれていますが、それはわたしたちの精神の内的構造が、ロゴスご自身を模倣した、「理性的（ロゴス的）な」ものだからです。人間の精神と神の精神との間の構造的類似性は、これはすでに、フィロンによって強調され、プラトン自

身の線上にあるのですが、オリゲネスを一種の観想修道生活に先取りの関わらせることになりました。彼は彼の弟子たちの禁欲的サークルでそれを共有していたのです。

ところで、オリゲネスとフィロンの間の主要な相違に人は気づかれるかもしれませんが、プラトンのようなものの考え方を共通に持ちながらも、このキリスト教神学者は創世記第一章に見られる人間創造の第一の物語よりも、むしろ第二、第三章から読みとれるような人間創造の第二の物語にますます関心を持つようになりました。この地上に設定され、地上的過ちに晒される人間のカップルこそが、「神の似像に創造された」(1:27) 第一章の牧歌的なカップル以上に、オリゲネスの関心の焦点となっています。それゆえ人間存在はオリゲネスにとって、とりわけ自由選択的存在であり、英知的及び物質的コスモスの全体において、本性と神の意志によって、身体的条件のもとで自己自身の運命を決定するよう運命づけられた、唯一無比な存在であります。フィロンには、人間の自由を社会的文化的に達成されるものとして祝することはありましたが、しかし彼は決してその形而上学的次元を主張しませんでした。オリゲネスにとって、人間性の端緒に関する聖書の神話のなかで原父母なるアダムとエバによって犯された罪は、地上的存在に対する決定的な挑戦であることを明らかにしています。わたしたちはもし自分たちの真の霊的本性の可能性を達成しようと望むなら、墮落した被造物の退廃した状態を克服すべきなのです。

そうしたものとしての人間存在は、このキリスト教解釈者の目には、よりドラマチックなものとなり、その際に禁欲の必要性に非常に強調が置かれました。オリゲネスの見解では、キリスト教の霊性は、教会共同体内部の信仰者の個々の振る舞いに集中していることとなります。それは知的な観点から見て、彼らが倫理的にどこまで達成しているかに集約されるので、その結果オリゲネスは、完成に向けて突き進んでいるエリート信仰者と、彼が「初心者」と呼ぶところのもっと多数を占める通常の信仰者の群とを区別することができるのです。彼の時代の哲学学派における指導者のように、オリゲネス

は、できのよい生徒たちとは、彼らに達成可能な完成の手だてと手段について議論したでしょうが、他方で、通常の信仰者に向けられた彼の講話（ホミリア）は、注目すべき忍耐をもって、もっと基礎的な教えを伝達したのです。

これまで近代の批評家たちは、オリゲネスをフィロン、ヌーメニオス、アッティコスや他の中期プラトン主義的哲学者と比較して、彼を中期プラトン主義者の最後に位置づけるという見解に達しています。しかしながらオリゲネスの解釈学の中心的位相は、その際見落とされてきたと言われねばなりません。キリスト教プラトン主義者オリゲネスは、同時に聖書のキリスト教的解釈者であり、彼が、神とコスモスと人間に関する学問の構造全体を打ち立てたとき、他の中期プラトン主義的思考に欠けているのはもとより、フィロンにも完全に欠けている、ひとつのカテゴリーに留意していました。すなわち「将来」というカテゴリーです。世界や人類についてのフィロンのビジョンには「将来」はなく、十分驚くべきことに、フィロンの膨大な著作は、彼自身の文化的ないし宗教的世界のなかで実際に将来がないのです。それが、将来の世代のために保存されるためには、アレクサンドリアのキリスト教学派の創設者たちによって引き継がれる必要があったのです。

オリゲネスにおいて、個々人の特別な実現と並んで、神による世界創造の宇宙的完成は、きたるべき最終段階によって、特別な意味を与られます。オリゲネスに固有な終末論、霊的旅ないしはコスモスの終わりに関する彼の印象的な教えは、彼の体系的な項目の中で、他と並んで扱われるべき一項目ではありません。終末論は彼の実在理解全体に、靈感を与えるものです。たとえば、彼は自分の見解において、トーラーと他の旧約聖書の文書はアレゴリーの解釈の観点から、新約聖書の子徴であると説明し、同時に新約聖書自体の神秘と教えは、神の啓示と創造がその最終的充満に将来到達した時の実在の究極の状態を、アレゴリーの意味で子徴すると説明するのです。わたしたちの現実存在は、わたしたちのすべての超越的信仰の知識をもってしても、最後のアポカタスタシス、すなわち時の終わりに神によって神の内に万

物が再構築される状態における、わたしたちの歓喜に満ちた完成の、いわば謙虚な序奏にすぎないのです。

聖書のアダムとエバの物語の正しい意味を把握するための、自由選択の根本的重要性は、オリゲネスによって繰り返し、グノーシス派のあらゆる理論や星辰による決定論への反論として主張されました。オリゲネスの体系においては、創世記神話を解釈する哲学的神学的範疇としての自由が、将来という観念と密接に結合され、それが創造されたコスモスにおけるわたしたちの現在の状況を考慮するための、解釈学的鍵になっています。このような自由や将来という範疇は、古代アレクサンドリアのプラトンの文化の文脈内においてキリスト教を理解するには、実に決定的です。これらの範疇は、古典的遺産を変貌させました。それらは前代未聞の次元を、この遺産と結合した神についての語りと人間学に導入したのです。

もしもわたしの考察が正しければ、なぜフィロンとアレクサンドリアの伝統のアレゴリー解釈の方法が全体として継ぎ目なしに、キリスト教の解釈者たちによって聖書の積義に適用され得たかが説明されたといえましょう。キリスト教の解釈者たちはそのような方法を手段として、古代後期の知的文化のプラトンの形態に調和するものとして、正しく考察していましたが、彼らの真の思考は別のところにあり、彼らの信仰の終末論的ダイナミズムによって焦点が合わされていました。このことは、要するに、古典哲学と聖書のキリスト教的積義が、アレクサンドリア文化の枠内での相互交換の可能な二つの知的試みではなかったことを意味しているのです。古典哲学は、プラトンやほとんど千年間のギリシア的基盤に遡る伝統と結びついており、他方、キリスト教の積義は、オリゲネスや、キリスト教の伝統内部の他の創造的な積義者の場合のように、現在に至るまで、福音書の出来事を新たに体験するという新しさから生み出され続けているのです。

* * *

日本の中世哲学会に提示したわたしの講演は、オリゲネスが『諸原理について』の終わりで記した言葉を借りて締めくくってもよいでしょう。引用し

ます。「さて今やわたしたちの議論を要約する時です。……それも以前には省略してたいくつかの点を扱いながら (4, 4, 1)」。わたしの場合、欠けているのは「いくつかの点」どころではありません。わたしは意図的に省いた、アレクサンドリアにおける古典哲学に関係する専門的な論点は数多くあり、それらはこの哲学の中世における受容の理解にとっては、非常に興味が持たれるところでしょう。たとえばプロティノスはアレクサンドリアで、「最初の三つの主要なヒュポスタシスについて」と題された、第五エンネアデスの内容を成熟させました。その構想がアレクサンドリアにいた彼の念頭にあった時は、まさにオリゲネスが『諸原理について』を著述していた時期でした。プロティノスの第五エンネアデスの中心的論点は、ソクラテス以前の形而上学者たちによって提起された最も古代的な問いに関わっていました。多様性が原初の一者の結果として生じるのは、いかにして可能なのか、その論点は、プロティノスより数十年後のアリウスのような、アレクサンドリアのキリスト教徒たちを魅了していましたが、それは彼らが「いかにして神の子、すなわち多様な創造の源泉かつ原理が、父の根本的で生まれざる単一性から生じるのか」という問いをめぐってアリウスの危機と呼ばれる論争を引き起こしていた時でした。

さらに古典哲学はアレクサンドリアにおいて、五世紀のヒュパティアや、六世紀前半のヨハネス・フィロポノス、オリュンピオドロスのような指導的人物のおかげで永続しました。ローマではボエティウスが、長く続いたアレクサンドリアのプラトン主義学派から、非常に多くを学んだと言われていませぬ。しかしそのような潮流を探るのは、また別の話でしょう。わたしの意図は、アレクサンドリアにおける古典哲学とキリスト教釈義との間の最初の出会いに関するいくつかの主要な局面を強調することにのみありました。わたしはフィロン、クレメンス、オリゲネスに焦点を当て、彼らがアレクサンドリアのプラトン主義に深く根ざしていることを確認しましたが、それは彼らのユダヤ教及びキリスト教の信仰の真の経験を強調することをぬきにはありえないものでした。

(出村和彦訳)